

比叡

横光利一

青空文庫

結婚してから八年にもなるのに、京都へ行くというのは定雄夫妻にとって毎年の希望であった。今までにも二人は度^{たび}度^{たび}行きかけたのであるが、夫妻の仕事が喰^くい違^{ちが}ったり、子供に手数がかかったりして、一家引きつれての関西行の機会はなかなか来なかつた。それが京都の義兄から今年こそは父の十三回忌をやりたいから是非来るようにと云つて来たので、他のことは後へ押しやつていよいよ三月下旬に京へ立つた。定雄は妻の千枝子が東京以西は初めてなので、定雄の幼年期を過した土地を見せておくのも良かろうと思い、一つは今年小学校へ初めて上る長男の清に、父の初めて上った小学校を見せてやりたくもあつたので、一人でとき

どき来ている京阪の土地にもかかわらず、この度は案内役のこととして気骨も折れた。

定雄夫妻は宿を定雄の姉の家にした。翌日は姉の子供の娘一人と定雄の子供の長男次男と、それに定雄夫妻に姉、総勢六人で父母の骨を納めてある大^{おわたに}谷の納骨堂へ参った。すでに父母は死んでいるとはいえ、定雄は子供を見せに堂へ行くのは初めてのことで反り^そを打った石橋を渡る襟^{えりくび}首に吹きつける風も穏やかに感ぜられた。彼はまだ二つによりならぬ次男の方をかかえて、もう盛りをすぎた紅梅を仰ぎながら石段を登った。清より一年上の姉の娘の敏子と清とは、もう高い石段を真つ先に馳^かけ登ってしまった。見えなくなった。定雄は石段を登る苦しさに身体がよほど弱つ

て来ているのを感じた。彼はその途中で、今年次ぎ次ぎに死んでいった沢山の自分の友人のことを思いながら、ふと、自分が死んでも子供たちはこうして来るであろうと思ったり、そのときは自分はどんな思いで堂の中から覗くものであろうかと思ったり、世の常の堂へ参る善男善女の胸に浮ぶ考えとどこも違わぬ空想の浮ぶのに、しばらくは閉口しながら子供らの後を追っていった。しかし定雄は千枝子や姉を見ると、彼女らは一向父母の骨の前に出る感慨もなさそうに、あたりの風景を賞しながら楽しげに話しているのを見ると、それではこの中で一番に古風なのは自分であるかと思ったりした。そのくせ京都へは幾度も一人で来ていながら、まだ彼は一度も墓参をしなかつたのである。

先きに行つた子供らは定雄らがまだ石段を登り切らないうちに、もう上の境内を追っかけ合いをして来た足で、また石段を降りて来ると、今度は母親たちの裾すその周囲をきやつきやつと声を立てて追つ馳け合つた。

「静になさい静に、また咳せきが出ますよ」と姉は敏子を叱しかつた。

しかし、子供たちは初めて会つた従姉弟いとこ同士なので、親たちの声を耳にも入れずまたすぐ階段を馳け上つていった。

一同揃そろつて上に登り、納骨堂へ参拝して、それからいよいよ本堂で経を上げて貰もらわねばならぬのであるが、誦経ずきようの支度のできるまで六人は庭向の部屋に入れられた。そこは日の目のさしたこともなかりうと思われるような、陰気な冷い部屋、畳は板のよう

に緊しまつて固く、天井は高かった。しかし、周囲の厚い金泥ふすまの襖ふすまは
永えいとく徳風の絢けんらん爛な花鳥で息苦しさを感じるほどであつた。定雄
は部屋の一隅に二枚に畳んで立ててある古い屏風びょうぶの絵が眼につ
くと、もう子供たちのことも忘れて眺ながめ入つた。葉の落ち尽した
池辺の林のところどころに、木蓮もくれんらしい白い花が夢のように浮
き上つていて、その下の水際みずぎわから一羽の鷺さぎが今しも飛び立とう
としているところであるが、臃おぼろな花や林にひきかえてその鷺一
匹の生動の気力は、驚くばかりに俊しゅんけい慧な感じがした。定雄は
これは宗そうたつ達ではないかと思つてしばらく眼を放さずにいると、
いつの間にか茶が出ていた。子供らは砂糖のついた煎餅せんべいを音無おとな
しく食べていたが、定雄の末の二つになる子だけは、細く割りち

らけて散乱している菓子破片の中で、泳ぐように腹這いになり、顔から両手にかけて菓子のかげらだらけにしたまま、定雄の見える屏風を足でぴんぴん勢い良く蹴りつけた。

「こりやこりや」

定雄は次男の足の届かぬように屏風を遠のけると、また倦かず眺めていた。しかし、火鉢ひばちに火のあるのに、ひどくそこは寒かった。これではまた皆風邪かぜにやられるどころか、定雄自身もう続かさまに嚏くさめが出て来た。そのうちによろやく経の用意も出来たので本堂へ案内されたが、来てみると、ここは一層寒いうえに、勿論もちろん火鉢も座蒲団ざぶとんもなかった。定雄の横へ敏子、清と並んで、定雄の姉が彼の次男を抱いている傍へ千枝子が坐った。見渡したと

ころ異常はなかったが、姉に抱かれている次男の突き出している足に、靴がまだそのままになっていた。しかし、次男の靴はまだ下へも降ろしたこともなく、足袋代りの靴と云えないものでもなかった。定雄は注意もせず黙って僧侶の出て来る方を眺めていると、姉はそれを見つけたらしい。

「あら、慶ちゃん、豪えらそうに靴を履はいたままやがな。これやどもならん」

と云つて、笑いながら慶次の靴をとろうとした。

「良い良い」と定雄は云った。

「そやな、愛あい嬌きようがあつてこれもお祖父じいさん、見たいやろ」

姉の言葉に慶次の靴を脱ぬがそうとした千枝子もそのままにした。

清と敏子とは仏壇の方を一度も見ずに、まだ石段からのふぎけ合いをつづけながら、肩をつぼめて「くつくつ」と笑い声を忍ばせて坐っていた。

誦経が始ると一同は黙って経の終るのを待っていたが、後から吹きつけて来る風の寒さに、定雄は長い経の早く縮ちぢまることばかりを願ってやまなかつた。しかし、もしこれが父の回忌ではなくて他人のだったら、こんな願いも起さずにいるだろうと思うと、いつまでも甘えかかるとの出来るのは、やはり父だと、生前の父の姿があらためて頭に描き出されて来るのだった。彼は父が好きであつたので、父に死に別れてからは年毎に一層父に逢あいたいと思う心が募つた。父は定雄の二十五歳のときに京けいじょう城じょうで脳のうい

溢血つげつのために斃たおれたので、定雄は父の死に目にも逢っていなかった。父が死んでから十年目に、彼は先輩や知人たちと飛行機で京城まで飛んだことがあったが、そのときも機が京城の空へさしかかると、まだそのあたりの空気の中に、父がうろろうさ迷っているように思われて、涙が浮き上って来たのを彼は思い出した。

ようやく長い誦経がすんで、一同は広い高縁ひに立つと、陽ひのさしかかって来た市街が一望の中に見渡された。

「さアさア、これで役目もすみましたよ」

そういう姉の後から、千枝子もシヨールを拡げながら、「ほんとに、これで晴晴しましたわ」と云って高縁の段を降りた。

後はもう定雄は家内一同をつれて、勝手にどこへでも行けば良

かった。

次ぎの日から彼は子供を姉に預け、千枝子と二人で大阪と奈良へ行つた。それをすますと見残した京都の名所を廻つて、最後に比叡山越しに大津に出てみようと思つた。大津は彼が最初に学校へ行つた土地でもあり、殊ことに六年を卒業するとき植えた小さな自分の桜が二十年の間に、どれほど大きくなつてゐるか見たかつた。

比叡登りの日には、毎日歩き廻つたため定雄も千枝子も相当に疲れていたが、次男を姉の家に残して清をつれ、ケーブルで山に登つた。定雄は比叡山へは小学校のときに大津から二度登つた記憶があるが、京都からは初めてであつた。千枝子はケーブルが動

き出すと、気持ちが悪いと云つて顔を少しも上げなかつた。しかし、登るにつれて霞かすみの中に沈んでいく京の街の瓦かわらは美しいと定雄は思った。

「見なさい。飛行機に乗ると丁度こんなだ」と定雄は清の肩を掴つかまえて云つた。

終点で降りてから頂上へ出る道が二つに別れていたので、定雄は先きに立つて広場の中を突きぬけて行くと、道は林の中へ這入はいつてしまつてだんだんと下りになつた。

「こりやおかしい。間違つたぞ」

定雄は道を訊きき正そうにも通行人がいないのでまた後へ引き返した。千枝子は常常から京大阪ならどこでも知っている顔つきの

定雄の失敗に、

「だから、豪そうな顔はするもんじゃありませんわ」と云つてやりこめた。

雪解けでびしょびしょの道をようやくもとへ戻ると、一組の他の人達と一緒になつたのでその後から定雄たちもついていった。

細い山道は陽のあつた所を解け崩くずしながらも、山陰は残雪で踏む度に草履が鳴つた。千枝子はときどき立ち停つて、まだ雪を冠かぶつている丹波たんばから摂津へかけて延びている山山の峰を見渡しながら、「おお綺麗きれいだ綺麗だ」と感歎しつづけた。

七八町も歩くと、また針金に吊つるされた乗物で谷を渡らねばならなかつたが、これはケープルよりも一層乗り工合が飛行機に似

ていた。

「この方が飛行機に似ているよ」

「これなら気持ちがいいけど、ケーブルは何んだかいやだわ」

そう云う千枝子に抱きかかえられている清は、

「ほらほら、また来た」と突然叫んで前方を指差した。

見ると向うから新しく仕立てて来た車が、こちらを向って浮いて来た。皆がしばらく口をぼんやり開^あけてその車の方を面白そうに眺めていた。するとその途端に、中継の柱のところで、急にごとりと車体が一度ずり下った。一同は息の根をとめて互に顔を見合したが、中継の柱が行きすぎた車の後方に見えると、初めて納得したらしくまた急に声を上げて、あれだあれだと云って笑い出

した。しかし、そのときにはもう新しく前方から来た車は、皆のびつくりしている顔の前を行き過ぎていたので、双方の車は安心のあとの陽気な気持ちで、互に手拭てぬぐいを振り合つて一層前よりはしやいだ。

車を降りて初めて地を踏んだとき、清は大きな声で、

「恐こわかつたね、さつき、ごとりつていうんだもの。僕、落つこちたかと思つた」と千枝子に云つた。

すると、車を降りてからもうずっと前方を歩いている人人まで、振り返つてまたどつと笑い出した。

頂上の根本こんぽんちゆうどう中堂ちゆうどうまではまだ十八町もあるというので、駕籠かごかをどうかと定雄は思つたが、千枝子は歩きたいと云つた。駕籠か

きはしきりに雪解の道の悪さを説明しながら三人の後を追って来てやめなかった。しかし、定雄も千枝子も相手にせず歩いて行くど、なるほど雪は草履を埋めるほどの深さでどこまでも延びていた。

「どうだ、乗るか」とまた定雄は後を振り返った。

「歩きましょうよ。こんなときでも歩かなければ、何しに来たのか分らないわ」と千枝子は云った。

定雄には、道はどこまでも平坦なことは分っていたが、清も弱るし、濡れた草履ぬの冷たさは後で困ると思ったので、

「乗ろうじゃないか。気持ちが悪いよ」とまたすすめた。

「あたしは乗らないわ、だって登りがもうないでしょう」と千

枝子はまだ頑強がんきょうに一人先に立つて雪の中を歩いていった。

「それじゃ、困ったって知らないぞ」と定雄は云うと尻しりを端折はしよつた。

道は暗い杉の密林の中をどこまでもつづいた。千枝子と定雄は中に清はきを挟んで、固かたそうな雪の上を選びながら渡つていった。ひやりと肌寒い空気の頬ほおにあたつて来る中で、鶯うぐいすがしきりに羽音を立てて鳴いていた。定雄は歩きながらも、伝教でんぎょうだいし大師だいしが都みやこに近いこの地に本拠ほんこを定めて高野山の弘法こうぼうと対立したのは、伝教でんぎょうだいしの負けだとふと思った。これでは京みやこにあまり近すぎるので、善よかれ悪あしかれ、京都の影響が響きすぎて困るにちがいないのである。そこへいくと弘法の方が一段上の戦略家だと思った。定雄は高野

山も知っていたが、あの地を選んだ弘法の眼力は千年の末を見つめていたように思われた。もし伝教に自身の能力に頼るよりも、自然に頼る精神の方が勝れていたらなら、少くともここより比良を越して、越前の境に根本中堂を置くべきであつたと考えた。もしそうするならば、京からは琵琶湖の舟楫と陸路の便とを兼ね備えた上に、背後の敵の三井寺も眼中に入れる要はないのであつた。

こういふような夢想に耽つて歩いてゐる定雄の頭の上では、また一層鶯の鳴き声が旺んになつて来た。しかし、定雄はそれにはあまり気附かなかつた。彼は自身に頼る伝教の小乗的な行動が、いま現に、まだどこまで続くか全く分らぬ雪の中を、駕籠を捨て

て徒歩で歩き抜こうとしている妻の千枝子と同様だと思った。それなら今の自分は弘法の方であろうか。こう思うと、定雄はまた弘法の大乗的な大きさについて考えた。出来得る限り自然の力を利用して、京都の政府と耐久力の一点で戦ったのであった。つまり、いまの定雄について考えるなら、駕籠を利用して行く先の不明な雪路を渡ろうというのである。弘法は政府と高野山との間に無理が出来ると行方ゆくえをくらし、問題が解決するとまた出て来た。そうして生涯安穩に世を送った弘法は、この叡山から京都の頭上を自身の学力と人格とで絶えず圧しつけた伝教の無謀さに比べて、政府という自然力よりも恐るべきこの世の最上の強権を操縦する術策を心得ていたのである。定雄は最上の強権を考えずして行う

行為を、身を捨てた大乘の精神とは考えない性質であつた。なぜかというなら、もし自我を押しすすめて行く伝教の行いを持続させていくなら、彼の死後につづく行者の苦慮は、必然的に天台一派に流れる底力を崩壊させていくのと等しいからである。

現に定雄は、千枝子と自分との間に挟まれて、不機嫌ふきげんそうにとぼとぼ歩いている子の清の足つきを見ていると、いつまで二人の歩みにつづいて来られるものかと、絶えず不安を感じてならなかつた。そのうちにしつこく従ついて来た駕籠かきは、いつの間にかいなくなっていたが、それに代つて、清の足つきを見ていた婆さんがまだついて来て、子供を坂本降くだりのケーブルの所まで負わせてもらいたいと云つて来た。

「どうする。清だけ負つてもらわなにか」と定雄はまた云つた。

「いいわ。歩けるわね」と千枝子は後ろの清を振り返つた。

「それでも、まだまだ遠いどすえ。こんなお子さんで歩けやしまへんが、安う負けときますわ」と婆さんは云いながら、今度は清と定雄の間へ割り込んで来た。

「でも、この子は足が強いんですから、もういいんですの」

「負つてもらえ負つてもらえ」と定雄は云つた。

「だって、もうすぐなんでしょう」と千枝子は婆さんに訊ねた。

「まだまだありますえ。安うお負けしときますがな。二十錢でいきますわ。どうせ帰りますのやで、一つ負わしておくんなはれ」
あくまで擦りよつて歩いて来る婆さんに、千枝子も根負けがし

たらしく、

「清ちゃん、どうする。おんぶして貰う？」と訊ねた。

「僕、歩く」と清は云つて婆さんから身を放した。

こんなときには、長く一人児だった清はいつも母親の方の味方をするに定^{きま}つていた。

「あなた坂本まで帰るんですの」と千枝子は婆さんに訊ねた。

「ええ、そうです。毎日通つてますのや」

「おんぶして貰う人ありません、こんなところ？」

「このごろはあんまりおへんどすな。毎日手ぶらどすえ」と婆さんは云つたが、もう清を負うのは断念したらしく、旅の道連れという顔つきで千枝子と暢^{のんき}気に並んで歩き出した。

定雄は傾きかかった気持ちもようやく均衡の取れて来るのを感じた。しかし、清は母と父とが自分のことで先から險悪になりかかっているのを感じているので、定雄が傍へ近づくとすぐ千枝子の身近へひつついて歩いた。定雄はこれから次ぎのケーブルまでこの婆さんがついて来るのだと思うと、気持ちを直してくれた婆さんであるにもかかわらず、先のいらだたしさがいつまた絡からみついて来るか知れない不安さを感じたので、今度は一番先頭に立って歩いていった。彼は歩きながらも、いま一人ここを歩いていたのでは今以上の満足を感じないであろうと思った。彼は幾度も京からこの道を通ったにちがいない伝教が、このあたりで、どんな満足を感じようとしたのかと、ふと雪路を歩いて浮ぶ彼の孤独な

なっていたが、広場から幾らか窪みの中にある中堂の廂からは、雪解の滴りが雨のように流れ下っていた。

「やっと来たぞ」定雄は後ろの千枝子と清の方を振り返った。

中堂の前まで行くには草履では行けそうもないので、三人はすぐ広場の端に立って下を見降ろした。早春の平野に包まれた湖が太陽に輝きながら、眼下に広広と横つていた。

「まあ大きいわね。わたし、琵琶湖ってこんなに大きいもんだとは思わなかったわ。まあ、まあ」と千枝子は云った。

定雄も久しく見なかつた琵琶湖を眺めていたが、少年期にここから見た琵琶湖よりも、色彩が淡く衰えているように感じられた。殊に一目でそれと知れた唐崎の松も、今は全く枯れ果ててどこ

が唐崎だか分らなかつた。しかし、京都の近郊として一山を開くには、いかにもここは理想的な地だと思つた。ただ難点はあまりにここは理想的でありすぎた。もしこういう場所を占有したなら、周囲から集る羨望嫉視の鎮る時機がないのである。定雄はこの地を得られた伝教の地位と權威の高さを今さらに感じたが、絶えず京都と琵琶湖を眼下に踏みつけて生活した心理は、伝教以後の僧侶の粗暴な行為となつて専横を行つたことなど、容易に想像出来るのであつた。これをぶち砕くためには、信長のようなヨーロッパの思想の根源である耶蘇教やその信者でなければ、出来難いにくにちがいない。定雄は神仏の安置所がこのような高位置にあるのはそれを守護する僧侶の心をかき乱す作用を与えるばかりで、却つて

衆生を救い難きに導くだけだと思われた。それに比べて親鸞の低きについて街へ根を降ろし、町家の中へ流れ込んだリアリステイックな精神は、すべて、重心は下へ下へと降すべしと説いた老子ろうしの精神と似通っているところがあるように思われた。

しかし、それにしても、定雄は琵琶湖を脚下に見降ろしても、まだ容易に放心は得られそうにもなかつた。伝教とて、時の政府を動かすことに夢中になる以上に、所詮しよせんは放心を得んとして中心をこの山上に置いたにちがいないであろうが、それなら、それは完全な誤りであつたのだ。定雄は根本中堂が広場より低い窪地くぼちの中に建てられて、眼下の眺望ちようぼうを利きかなくさせて誤魔化してあるのも、苦慮の一策から出たのであろうと思つたが、すでに、

中堂そのものが山上にあるという浪漫主義的な欠点は、一派の繁栄に当然の悪影響を与えているのである。

定雄は清と千枝子をつれて、いくらか下り加減になって道をまた歩いた。ここは京向きの道より雪も消えて明るいためでもある。鶯の鳴き声は前より一段と賑にぎやかになって来た。彼は途中、青いペンキを塗った鶯の声を真ま似ねる竹笛を売っていたので、それを買かって一つ自分が持ち、二つを清にやった。その小さな笛は、尻おきを圧おえる指さきの加減一つで、いろいろな鶯の鳴き声を出すことが出来た。定雄は清に一声吹いてみせると、もう疲つかれで膨ふくれていた清も急にこつき出して自分も吹いた。歩く後から迫おつて来るのか、鶯の声は湧わき上あるように頭の上でしつづけた。

定雄は吹く度にだんだん上達する笛の面白さにしばらく楽しんで歩いてみると、清も両手の笛を替る替る吹き変えては、木の梢こずえからすべ下り流れる日光の斑点はんでんに顔を染めながら、のろのろとやって来た。

「まるで子供二人つれて来たみたいだわ。早くいらっしやいよ」

千枝子は清の来るのを待つて云った。清は母親に云われる度二人の方へ急いで馳かけて来たが、またすぐ立ち停った。道が樹のない崖がけ際ぎわにつづいて鶯の声もしなくなると、今度は清と定雄とが前と後とで竹笛を鳴き交かわせて鶯の真似をして歩いた。そのうちに清もいつの間にか上手になつて、

「ケキヨ、ケキヨ、ホーケツキヨ」

とそんな風なところまで漕ぎつけるようになって来た。

「あ奴いつの鶯はまだ子供だね。俺のは親鳥だぞ。お前も一つやってみないか」

定雄は笑いながら千枝子にそう云って、

「ホー、ホケキヨ、ホー、ホケキヨ」とやるのであった。

千枝子は相手にしなかったが、崖を曲るたびに現れる湖を見ては、手を額にあてながら楽しそうに立ち停って眺めていた。

間もなく三人はケーブルまで着いたが、まだ下る時間まで少しあったので、深い谷間に突き出た峰の頭を切り開いた展望場の突端へ行つて、そのベンチに休んだ。定雄は櫃かやの密林の生え上つて来ている鋭い梢の間から湖を見ていたが、ベンチの上に足を組

むと仰向きに長くなつた。彼は疲労で背中がべつたりと板にへばりついたように感じた。すると、だんだん板に吸われていく疲労の快感に心は初めて空虚になつた。彼はもう傍そばにいる子のことも妻のことも考えなかつた。そうして眼を一点の曇りもない空の中に放つてぼんやりしていると、ふと自分が今死ねば大往生が出来そうな気がして来た。もう望みは自分には何もないと彼は思った。いや、枕が一つ欲しいと思つたが、それもなくとも別にたいしたことでもなかつた。

千枝子も疲れたのか黙つて動かなかつたが、清だけはまだ、

「ホー、ケツキヨ、ケツキヨ」と根よくくり返して笛を吹いた。

定雄はしばらく寝たまま日光にあたつていたが、もう間もなく

発車の時刻になれば、今の無上の瞬間もたちまち過去の夢となるのだと思った。そのとき、急に彼の頭の中に、子のない自分の友人たちの顔が浮んで来た。すると、それは有り得べからざる奇妙な出来事のような気がして来て、どうして子のないのに日々を忍耐していくことが出来るのかと、無我夢中に暴れ廻った延曆寺えんりやくじの僧侶達の顔と一緒にあって、しばらくは友人たちの顔が彼の脳中を去らなかつた。しかし、これとて、ないものはないもので、有るものの煩悩ぼんのうのいやらしさをおかしく眺めて暮し終るのであろうと思ひ直し、ふとまた定雄は天上の澄み渡った中心に眼を向けた。

「神神よ照覧あれ、われここに子を持てり」

彼は俎まなの上に大の字になって横よこつたように、ベンチの上ののびと横よこつていた。彼は伝教のことなどもう今はどうでもよかつた。しかし、時間は意外に早くたつたと見えて、うつらうつら睡ね気がさして来むけかかったとき、

「もう切符を切つてしましてよ。早く行かないと遅れますわ」突然千枝子が云つた。

「発車か、何んでも来い」と定雄は不貞ふてぶて不貞ふてぶてしい気になつて起き上つた。彼は坂道を駅の方へ馳け登つて行く千枝子と清の背中を眺めながら、後から一人遅れて歩いていった。

定雄が車に乗るとすぐケープルのベルが鳴つた。つづいて車は湖の中へ刺さり込むように三人を乗せて真直ぐに込こつていった。

「ホー、ケキヨケキヨ、ホー、ケキヨケキヨ」と清は窓にしがみついたまままだ笛を吹きつづけていた。

青空文庫情報

底本：「機械・春は馬車に乗って」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月20日初版発行

1995（平成7）年4月10日34刷

※表題は底本では、「比叡《ひえい》」となっています。

入力：MAMI

校正：松永正敏

2000年10月7日公開

2013年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

比叡

横光利一

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>